

# 前近代日朝間交流における礼曹の登場

國 原 美佐子

## 本稿の目的

今日に至るまで前近代日朝関係史には多くの先行研究が蓄積されてきた。<sup>(1)</sup> 本稿では、その学恩をうけながら、朝鮮王朝の正史である『朝鮮王朝実録』（以下『実録』）を主たる史料として、朝鮮王朝の行政機関である六曹の一つ「礼曹」が初期の日朝間の通交に関わっていく過程を整理する。

日本、中国（明）、朝鮮半島（朝鮮）は十四世紀末にそれぞれが政權交替した結果、新しい通交関係を構築することになった。つまり、明を中心、朝鮮・日本他を周縁と考える冊封体制の成立である。宗主国と被冊封国との間には基本的には国王間外交のみが展開された。

東アジアの通交を考える際にその検討空間を「漢字文化圏」と呼ばれる文化背景によって規定できることが指摘されて久しい。<sup>(2)</sup> 確かに口語は異なるが文語は共通する文化圏において漢字や漢詩文創作能力は

前近代日朝間交流における礼曹の登場

意思疎通の面で必要条件となる。<sup>(3)</sup> 一方で被冊封国が宗主国に倣い、中国で始まった「礼」を受け入れ、礼の実践でもって他国と接することを共通点とする「儒教文化圏」を構築していたとする研究が一九八〇年代に欧米を中心に盛んになったこともあるが、日本に関する限り否定的な見方が主流である。<sup>(4)</sup> 筆者も十五・六世紀の日本の文化・文物受容に対する積極性に比して通交相手である中国や朝鮮の政治制度を導入することがなかった理由を史料から明確に見出すことはできないが、明からの冊封を受けることで東アジアに属していながらも、室町時代の日本の政治制度は非東アジア的であったという意見には異存はない。<sup>(5)</sup>

先学の研究をもとに、関周一氏は十四世紀後半から十六世紀の東アジア海域の交流が「明と周辺諸国との冊封関係に代表されるような国家や地域権力が主導する交流と、倭寇・密貿易に代表されるような民衆レベルでの交流の二つのレベルを想定できる。これらの交流は無関

係に存在していたのではなく、相互に深い関係をもつて展開されていた<sup>⑦</sup>と述べられた。明や朝鮮のような中央集権政治によって通交が規制される国では国王使節の通交のみが許可され、それ以外の私的通交は一切禁じられた。日本は室町將軍が日本国王として明より冊封をうけたが、これらの規制を徹底させるだけの強い政治力を集中させる政治体制を確立できなかった。そのため、通行相手国の対応によって「日本国王使」のみならず「地域権力者である個人」「倭寇などに代表される個人」の通交が可能となったのである<sup>⑧</sup>。

明や日本に派遣する使者には朝鮮国王使（朝貢使・通信使）以外には存在しなかった朝鮮の外交はどの国に対しても「朝鮮国王」が外交の中心に存在する一元的ルートで展開したのに対し、日本は多元的な通交ルートが機能していた。そのため朝鮮は室町幕府に対しては「交隣」<sup>⑨</sup>の概念でもって日本国王使と日本回礼使（朝鮮国王使）との交聘（外交）を展開させたが、同時に、利益追求を目的に来朝する諸島使人と呼ばれる地域権力者や国境に囚われずに領域を往来する倭人との通交も、「人臣義無私交」<sup>⑩</sup>という姿勢を固持しつつも「厚加勞慰」<sup>⑪</sup>の態度で認めてきた。その背景に「倭寇」問題があったことは改めて言うまでもない。

このように多元的ルートで通交をおこなう日本をはじめ、朝鮮へ通交のために来る諸国・諸地域からの使節・使人を受け入れる朝鮮側の

外交担当官衙が「礼曹」である。

なお、今回は主たる検討期間を朝鮮成立期から応永の外寇（己亥東征）後の世宗元年までとする。この時期は議政府と六曹の大幅な改革をおこなった第三代朝鮮国王太宗が第四代世宗に譲位したものの実際には上王として実権を握っていた。また、十五世紀の日朝関係を転換させる事件の一つが応永の外寇であり、区切りとなると考えるためである<sup>⑫</sup>。

## 一、朝鮮王朝政治機構における礼曹の変遷

### （一）六曹制成立以前の礼曹

まず、朝鮮王朝成立以降の政治組織の変遷における礼曹の変遷について先学の研究を参考に略記する。

朝鮮王朝は前王朝の高麗に倣い<sup>⑬</sup>国王を中心とした中央集権国家として政治組織の整備を行なった。当時の中国や朝鮮では五礼（吉・嘉・賓・軍・凶）礼を中心に政治分野を調整し王権を最高の位相に分類することで権威を与える儀礼体系<sup>⑭</sup>によって定められた儀式、作法を遂行していくことが王権の確立であり、政治行為であった。外交は五礼の一つである賓礼に基づいて行なわれた。李範稷氏が指摘されるように、賓礼は朝鮮王朝の属する国際政治秩序の中で朝鮮の位相を明らかにする内容として構成されている<sup>⑮</sup>。つまり外交の基本を事大交隣においた

朝鮮は中国を事大、日本と琉球を交隣の対象と位置付け、それに見合う賓礼行為を行なうよう定めた。さらに、朝鮮は日本に対して「敵礼」の行為で外交を進めようとした。<sup>(15)</sup> この「賓礼」の行為の多くを掌る官職が本稿で検討する「礼曹」である。

礼曹は朝鮮時代に設置されたものではない。高麗王朝の歴史を整理し文宗元年（一四五二）に完成した『高麗史』の「百官」条において礼曹の存在を確認することができる。それによると高麗時代の礼曹は、「禮儀・祭享・朝會・交聘・学校・科擧之政」を掌っていたことがわかる。<sup>(16)</sup>

儀章法制を前朝の故事に依った政權交替当初の朝鮮王朝は高麗時代からの「政治的、社会経済的、思想的に一段階発展した形態への変化」が要求され、王權交替の正当性を儒教思想の礼、つまり現実社会の秩序を規範的、構造的に説明するところに求めたのである。そのために、高麗時代から続いた五礼を名分とし、政治的秩序を性理学とよばれる儒教理念に求めた。政治を支える士大夫たちはこの名分と政治的秩序を合致させることにつとめ、儀礼を運営した。<sup>(17)</sup>

朝鮮王朝の官制にはその内容や名称について数度の変遷を経ている組織もあるが、六曹は前王朝以来、朝鮮時代初期より一貫して存在する。朝鮮時代の「礼曹」の初見は『実録』太祖元年（一三九二）七月丁未条の朝鮮国王となった太祖が文武百官の制を制定する記事である。六曹は諸官の一つとして「百揆庶務」を掌る議政府の下に位置し

た。礼曹は「祭享・賓客・朝會・科擧・釈道・進献」に携わる職務を担った。その後、政治制度が改訂され、太宗五年（一四〇五）正月壬子（一五日）には最高統治機関である議政府の庶務が「吏・戸・礼・兵・刑・工」に分割附与された形での六曹制に改められた。

## （二）礼曹の職掌詳定

太宗五年三月に新たに礼曹によって六曹の分職と所属が詳定された。<sup>(18)</sup> 礼曹に関する部分は以下の通りである。

『太宗実録』卷九太宗五年三月丙申条

禮曹詳定六曹分職及所属。（中略）。

禮曹掌礼樂・祀祭・燕享・貢擧・卜祝等之事。其属有三、一曰稽制司、二曰典享司、三曰典客司。稽制司掌儀式・制度・朝會・經筵・史館・学校・貢擧・圖書・祥瑞・牌印・表疏・冊命・天文・漏刻・国忌・廟諱・喪葬之事。正郎一人、佐郎一人。典享司掌燕享・祀忌・牲豆・飲饌・醫藥之事。正郎一人、佐郎一人。典客司掌使臣迎接、外方朝貢、燕設、賜與等之事。正郎一人、佐郎一人。<sup>(20)</sup>

（略）

禮曹所属藝文館・春秋館・經筵・書筵・成均館・通禮門・奉常寺・禮賓寺・典醫監・司諷院・書雲觀・校書館・文書院奉司・宗廟署・司醞署・濟生院・惠民局・雅樂署・典樂署・司饗所・膳官署・道

流房・福興車・東西大悲院・氷庫・種薬色・大清観・昭格殿・図書院・架閣庫・典厩署・社稷壇・慣習都監・僧録司・各道学校・医学。

礼曹の職掌は太祖元年に制定された時と比較すると、釈道がなくなり、卜祝が新たに加わったほか、議政府から六曹への庶務の移行に伴い、「稽制司・典享司・典客司」の三つの部署(司)にさらに分掌され、各司に正郎(正五位)、佐郎(正六位)が一人ずつ配置されるという変化があった。<sup>(21)</sup>特に典客司が外交儀式に関する実務を担当するよう定められた。<sup>(22)</sup>「所屬」以下で記された官銜名は礼曹の職掌を支える官銜で、『経国大典』<sup>(23)</sup>礼典や『国朝五礼儀』<sup>(24)</sup>「賓礼」などに規定される儀式はこれらの官銜が担う職務によって構成されている。

六曹制が成立し、いよいよ公に礼曹が外交に携わる組織でもあることが成文化されたが、『実録』内の日本関係の記事からは「礼曹」が有機的に機能していることを確認することはできない。議政府と六曹の分掌はさほどうまくいかず、後述のように、むしろ、議政府が日本通交使へ対応する様子が『実録』に残されている。六曹制成立後は、六曹から王への直啓が認められ六曹の成長・拡充が進み、太宗の王権が強化され宰相たちの権限が縮小される予定であったが、実際には太宗八年(一四〇八)、十四年(一四一四)の二回にわたる調整が必要であ

<sup>(25)</sup> った。礼曹の日本からの通交者に関する記事が『実録』に登場するのは、太宗十四年まで待たなくてはならない。

## 二、通交使節と礼曹

### (一) 太宗以前

ここでは、日本からの通交者の受け入れの実際について、太祖期から世宗五年までの『実録』記事を通して考えてみたい。具体的には国王引見に参加した日本人通交者に関する記事を紹介する。

室町期の公の日朝関係は太祖元年閏十二月に倭寇対策を求めて来日した僧覺鑑<sup>(26)</sup>に対し、足利義満が絶海中津に「必當備兩國之隣好、永結二天之歡心、實所願也」と隣好を希望しつつも、併せてその際に、義満は「然而我国将臣自古無彊外通問之事、以是不克直答来教、(中略)非慢禮也」とこの時期の外交権は天皇にある、と暗に示す返書を書かせた時を開始とする。そして実際に日本国王使(足利義満使)の来朝まではしばらくの時を要した。日本国王使の引見の初見は、定宗元年(二三九九)五月に通信使朴惇之と共に来朝した日本国大將軍の例である。

『実録』定宗元年五月乙酉条

日本國大將軍、遣使来献方物、発還被虜男女百余人、上御正殿引

## 見、命立四品班次行札。

ちなみに、四品は土官の最上位に相当する。参上官に相当する位で札を行なったのである。翌月、使者一行十名は詣闕後に酒食を賜った。<sup>(27)</sup> 帰国前には国王は西涼庁で引見し、詣闕拝辞したことが『実録』には記されているが、詳細は不明である。なお、『実録』で確認できる日本人通交者の初見は、太祖元年十月丁卯条の「日本筑州太守藏忠佳」の使者「藏主・宗順」である。また、太祖三年九月戊申条で国王の視朝に日本及び琉球国の使人（名不明）が参朝し、随班行札を行なった記事もあるが、詳細は不明である。

日本人通交者の接待「享宴」の初見は『実録』太祖五年（一二三九）<sup>(28)</sup> 十二月の降倭魁疾六ら一行四人の国王引見の場に確認できる。彼らは朝班を詣で、肅拜し、<sup>(29)</sup> 国王からの来朝目的に関する質問に回答した。国王は三司左僕射である禹仁烈と芸文春秋館学士である河崙に対し、所館にて宴を設けるように命じた。朝鮮は「札」でもって外交を行なうことを国是としたので、札を損なう事のない様に、来朝者の格に合った接待を行なっていたはずであるが、残念ながら、宴の具体的な様子は不明である。翌日、疾六及び非疾時知は受職する。太祖は翌年二月にも勤政殿において疾六を慰問し、それに感激した疾六は「不敢仰視、流汗出涕而已」という状態であったという。この受職倭人への懐

柔策はその後も続き、朝鮮官人が倭魁一行を引き連れて朝参する例が『実録』で確認できる。<sup>(30)</sup> なお、降倭の朝班での位は東八品頭のやや後であった。<sup>(31)</sup>

つまり、この時期の『実録』には日本人通交者の詣闕拝辞や引見、または宴を行なった事実を確認するのみである。

## （二）太宗期

太宗二年（一四〇二）には議政府の催す日本使僧（大相国義満使者）用の宴の席次や宴席の相手を検討した。<sup>(32)</sup> 前回（一二三九）の先例とは異なり、席を南向きとし、宴席の相手には政丞（正一品）が中国使臣の接待で多忙であるという理由によって別の者に任せる予定であったが、それを知った使僧に先例を要求されたことが発端であった。この時、太宗は「政丞以下が対酌せよ」と答えている。『実録』太宗二年七月壬辰条には日本國大將軍（足利義満）宛に議政府が致書したと記録されている。また議政府は太宗四年正月辛亥には宗貞茂に致書を行なっている。このように、太宗初期には議政府が日本との通交にかかわる例を『実録』内で確認することができる。<sup>(33)</sup>

太宗五年（一四〇五）には日本国王使僧周棠は五品班行で札を終え、<sup>(34)</sup> 翌年正月の元旦朝賀に参加した。<sup>(35)</sup> 六月甲申条では、国王が御正殿で再度来日した日本国王使を引見し、升殿を命じている。太宗七年（一四〇七）も升殿は国王使のみが認められている。<sup>(36)</sup> 太宗八年九月に日本国

王使と共に来日した九州節度使使者の詣闕拝辞の際に、国王は西廂へ饋を命じたが親見をしなかった。翌日、太宗は不服の使者に謝罪をし、内侍に西廂へ饋を命じた。『実録』太宗九年閏四月戊辰条の、大内多々良徳雄使僧である周鼎の詣闕辞では太宗の引見と労いを確認できる。いずれにしても引見の事実のみで詳細な状況は不明である。

唯一、礼曹が詣闕に関わっていたことを示す史料がある。

『実録』太宗十一年十二月乙未条

罷礼曹佐郎鄭藹然・兵曹佐郎琴柔職、初 上欲倭使與朝衙、兵曹不供駟騎而致不及設新儀仗、上怒命憲司推之。憲司上疏曰、礼曹佐郎鄭藹然、曩以日本使人詣闕事、遲緩移文、使兵曹不得拝設儀仗、且令使人徒步詣闕、兵曹佐郎琴柔多置驛騎於闕門、以備不慮職也。只留七匹不及弁送、皆不称職、右二人之罪、上裁施行乃有是命。

この記事は、太宗十一年十二月丁亥日に日本国王使、大内氏使人が国王に引見した八日後の行なわれた朝衙にあたり、礼曹佐郎と兵曹佐郎が通交者が朝衙で使用する駟騎（つぎうま）や儀仗（儀式に使う兵器）を整える業務を怠ったため罷免されるという内容である。

これは通交使者の儀式準備に関わる礼曹の具体的業務を明らかにし

た初見史料である。今回の二人の失態は、礼曹佐郎が日本使人の詣闕に関する移文が遅かったことが一因であった。つまり、礼曹には予め担当部署に詣闕の必要職務を手配することが職務の一つであったことを意味する。しかし、それ以後暫くは礼曹が関係する記事が『実録』には残されていない。

ところが、太宗十四年（一四一四）以降、一転して日本関係の記事に礼曹やその構成員の動向、発言が記されるようになる。

太宗十三年（一四一三）に議政府左政丞河崙の独断専権への非難に端を発し、河崙が「我朝之制、皆倣中朝、宜以政府事、分付六曹、以効六部之制」と上啓することで決着した太宗十四年四月庚申（十七日）に、「議政府と六曹の完全分掌」が定められ、よって王権の確立がなされた。この分掌にあたり議政府から出された礼曹に係する条件は「大宴享、中外請暇等事、送于礼曹」「各年条例文書、未謄録事、送礼曹、已謄録事、藏架閣庫、」の二件である。<sup>(38)</sup> この二つの出来事を得て『実録』では外交にかかわる礼曹の記事が増える。

太宗十四年四月に議政府から完全に独立し礼曹が外交を職掌とすることになったのとはほぼ同時に、同年四月乙丑（二十二日）に宴享において日本国王使臣の接待を六曹判書が、諸島使客については礼曹堂上（官）が待るという担当役割分担が「宴勞日本使客法」として定められたのである。これは永為恒式の規定とされた。太宗初期に政丞が宴享

を担当したことから、この法の制定は議政府の庶務が六曹に分掌された一例である。また、この制定は日本人使者の派遣を望む者（地方権力者など）が急に激増したことにも関係があるのではないか。数ヶ月後に太宗は礼曹判書黃喜らを交え協議の結果、宗貞茂に対し十箇所からの倭使以外の出送を禁じる（太宗十四年八月丁未条）旨を決定しているからである。

政丞の日本通交者に関する方策の関与例が少ないために単純に比較できないが、礼曹が議政府の「対日関係」庶務を継承した例として、地方権力者に対する致書を挙げたい。

太宗十四年八月以降の礼曹と地方権力者との間で書状の授受が続く。礼曹からの致書は通交者へ国王の意図を伝えることが主目的であった。六曹の一つとして「各以職事直啓奉旨奉行」し擬議を厭わない礼曹は増加する日本からの通交者に対し素早い対応をとり、国王の意図を通交者に文書の形で伝えるなどの業務をこなすには都合のよい機関として機能したと考えられる。

次代の国王世宗の治世は前代国王である太宗が計画した太宗十九年（世宗即位年、一四一九）の「応永の外寇」（対馬島への出兵）の事後処理から始まった。<sup>(40)</sup>太宗は対馬島守護都熊瓦に書状で自らの対諸島政策を「以恩信懷緩之道」を示して以来、途中、草竊不恭の事があったとしても、信使が来朝すれば館に留め、礼曹に「厚加勞慰」を命じ

た」と伝えた。<sup>(41)</sup>このように上王自らが、礼曹の職務として王の「厚加勞慰」を体現する役割があることを通交者に伝えた文書は珍しい。<sup>(42)</sup>

また、対馬からの「心實謫詐」である降倭の増加が問題になり、許稠は「使臣」と称して売買を求める倭人が増えるにつれ、朝鮮の駅吏が弊害をうけるようになり、時折は倭人が論功怒叱の状態で礼曹のもとにまで行き不都合をのべる状況であることを伝えた。<sup>(43)</sup>これは礼曹の役人が倭人と接しやすい立場にすることを記す貴重な史料でもある。よって、書契を持つてくる倭人には礼を以て接待し、ただの使人には接待をしない、と厳密に区別をつけるべきであるとする礼曹の上啓が認められた。これは朝鮮側の書契要求の初見でもある。倭人との交通を許すのであれば、倭館を漢城の外に作り入京させるべきではないなど、礼曹の対日通交に関する上啓の機会は増加の一方であった。

太宗の死後、完全に世宗の代になってから、朝鮮側では日本からの来朝者に対する接待方法を徐々に整理した。来朝者を「日本国王使臣」「厚待客人」「その他（倭人）」に三分し、それぞれに合せた礼でもって接待をしたのである。<sup>(45)</sup>朝鮮側の役人に対しても、礼を強く要求し、倭人が慶尚道水軍処置使や都領撫処へ収賄行為をしようとした際には「人臣義無私交、勿受送還」と風紀を保つように指導していくなど、礼曹は対日関係業務により広面で関わっていく。<sup>(46)</sup>世宗期には『経国大典』内の「礼典」、『世宗実録』に収録された「五礼儀」<sup>(47)</sup>及びその集成でも

ある『国朝五礼儀』の編纂が始まる。そこには記されていることは太宗期から世宗期にかけての礼曹が携わった交聘の様子に他ならない。

## 結論

朝鮮王朝時代当初から「賓客」を職掌の一つと定められているために、後世の概説書は、礼曹の職掌に儀礼や教育に並列して「宴享、朝貢、交聘（つまり「外交」）<sup>(48)</sup>」を挙げる。しかし、朝鮮王朝初期に礼曹が日本からの通交者にかかわることは稀であった。むしろ議政府がその職掌に携わる例を確認することができる。

本稿は、『実録』内の日本通交者関係の記事を追い、太宗十四年の議政府と六曹の完全分離およびそれに伴う礼曹の職掌の明文化、そして数日後の「賓勞日本使客法」制定をもって、礼曹が外交における職掌に携わるようになったことを明らかにした。太宗の議政府と六曹の分職があつてこそ、礼曹が外交担当官衙として日本の多元的な通交に有機的に対応できるようになったのである。故に朝鮮時代の礼曹の外交担当業務は太宗期に成立したと言っても過言ではない。筆者は、礼曹登場の必要性の一つを朝鮮へ渡朝する、特に地方権力者の日本人の増加対策<sup>(49)</sup>があつたと目下のところ考えている。今回は著者の都合により日本からの通交者と礼曹との書状の往来をはじめ、具体的な職掌についての詳細な検討を割愛したので近く稿を改めたい。『実録』に記さ

れた通交者への答書・致書行為、倭人対策の擬議、通交者の宴や儀式の準備などに取り組む礼曹の姿が後に『経国大典』で規定される礼曹の職務として、そして彼等が携わった儀式が『五礼儀』の「賓礼」として後世に残ったというのが私見である。礼書編纂には申叔舟など日本への通交経験者や許稠など『実録』の日朝関係記事において名前の確認できる人物が関わっている。<sup>(50)</sup>礼曹の構成員個人の経歴も視野にいて、前近代の日朝関係における礼曹の役割についてさらに検討を深めたい。

## 註

(1) あまりに大量の先行研究があるため、各論文名や著書名を挙げる事は控えたい。近年の前近代の日朝関係、もしくは東アジア交流史をテーマとした著書の参考文献一覧を参考にされたい。

(2) 田中健夫「漢字文化圏のなかの武家政権」(『前近代の国際交流と外交文書』所収、吉川弘文館、一九九六年。初出は『世界』七九六、一九八九年十月)。

(3) 村井章介『東アジア往還』(朝日新聞社、一九九五年)

(4) 一九八〇年代にアジア新興工業経済地域(NIES)の興隆に注目した西欧が「儒教文化圏」に関する研究を始めた。しかし、古田博司氏の当時の日本での動きについてまとめた文章によると、日本人研究者からはこの文化圏設定については否定的な言葉が出ていたという。日本でも共同研究やシンポジウム開催などの動きがあつたが、溝口雄三氏は儒教を「礼制、哲学思想、政治経済理念、中間指導層の責任理念、共



団体倫理、個人倫理の六側面をもつ総合システムである」が、日本には個人倫理のみが受容された、いわゆる「相互の差異性」(日仏科学セミナー主催「儒教とアジア社会」での溝口雄三氏の基調講演での発言、一九八八年)を重視する傾向にあったという(古田博司「東アジア中華思想共有圏の形成」『東アジア・イデオロギーを超えて』新書館、二〇〇三年)。また澤井啓一氏も「日本儒学が日本にもたらされたときから、東アジアの他の地域とはかなり異なる展開が繰り広げられてきた」(『八記号』としての儒学』八頁、光芒社、二〇〇〇年)と指摘している。

(5) 多くの先行研究ではその理由を江戸時代まで中央集権政治が展開されなかったためとする。姜在彦氏は「日本では十二世紀後半以降に展開された武家の世界では、実力が万能であって、君臣および上下の関係はその実力によって左右され儒教的名分論は通用しなかった」(『朝鮮儒教の二千年』一二九頁(朝日新聞社、二〇〇一年))と、また古田博司氏は「江戸時代にも政治思想として儒教を取り入れたわけではない」(『東アジア中華思想共有圏の形成』(『東アジア・イデオロギーを超えて』新書館、二〇〇三年)と指摘している。

(6) 義江彰夫氏は一国一王権の論理で東アジア諸国が公武二重王権と地方的公権力の特徴とする中世日本に外交や戦争という外的圧力をかけたが、この多元化した構造を打ち砕き官僚制統一王権を作り出す揺さぶりをかけることはできなかったと指摘されている。(義江彰夫「朝廷・幕府の分立と日本の王権」荒野泰典他編『アジアのなかの日本史』第二巻所収、東京大学出版会、一九九二年)。

(7) 関周一「序論」(『中世日朝海域史の研究』所収、吉川弘文館、二〇〇二年)。この「序論」は近年の中世日朝関係史の研究動向も集約しており、本論文も多くをここに拠った。

(8) 田中健夫氏は、政治・経済・文化を含む国際交流・地域間交流の諸相

を「国家対国家」「国家対個人」「国家と係わりのない個人対個人」の三関係に分類することができると指摘されている(『漢字文化圏のなかの武家政権』二一三頁『前近代の国際交流と外交文書』所収、吉川弘文館、一九九六年。初出は『世界』七九六、一九八九年十月)。

(9) 「交隣」という概念については、日本では、中村栄孝氏の研究(中村栄孝「日鮮関係史の研究(上)」四頁、吉川弘文館、一九六五年)をはじめ明の冊封体制によって成立した縦の関係(事大)に対する被冊封国同士の横の「対等な」関係と理解されることが多い。一方、この問題に関する韓国における研究を紹介する閔德基氏は、交隣に伴う「進上」行為が朝貢関係と類似している点、周辺から来朝する諸勢力(入国倭野人)を受職させ懐柔している点など、交隣が必ずしも対等関係を志向していないと考えられていると指摘している(閔德基「朝鮮朝前期の「交隣」にみる対外関係」(『前近代東アジアのなかの韓日関係』第一章、早稲田大学出版部、一九九四年)。

(10) 『世宗実録』世宗五年一月丙午条。

(11) 『世宗実録』世宗元年七月庚申条。

(12) 応永の外寇そのものは三ヵ月足らずの外征である。しかし、朝鮮と対馬からの通交者との様々な規約が定められていく契機にもなった。

(13) 高麗の政治機構は泰封の官制を主軸とし新羅の官制を併用したものを基盤として成宗二年(九八三)に整備をはじめ文宗三十年(一一〇七六)に完成したといわれる(韓永愚(吉田光男訳)『韓国社会の歴史』一六四―一六七、二四〇―二四五頁、明石書店、二〇〇三年。なお原著は『取り戻す私たちの歴史』経世院、一九九七年)。

(14) 李範稷(浅井良純訳)「朝鮮王朝における王権と五礼」(『朝鮮学報』一三八輯、一九九一年一月)四六頁。

(15) 「敵礼」とは敵国抗礼を意味する。つまり対等な礼の交換によって外交関係を結ぶ事をいう。なお、朝鮮王朝の対明認識は事大であると多く

の概説史で述べられているが、山内弘一氏は「李朝初期に於ける対明自尊の意識」(『朝鮮学報』九二輯、一九七九年七月)で、朝鮮の朱子学者の認識では朝鮮は中国大陆の付属物ではなく自己完結する一つの世界であったという指摘をされている。この発想は朝鮮がその後展開する小中華主義の基本にあると考えるべきであろう。

『高麗史』卷七十六、志卷第三十「百官」。礼曹は元来は礼官と称した。何度かその呼称を変え、最終的には恭讓王元年(一三八九)に礼曹と改称した。

(17) 李範稷(浅井良純訳)「朝鮮王朝における王権と五礼」(『朝鮮学報』一三八輯、一九九一年一月)四五―四九頁。

(18) 定宗二年に都評議使司から改称し、太宗元年に門下府を併せてできた最高統治機関。

(19) 『太宗実録』(以下『太宗』)太宗五年三月丙申(一日)条。

(20) 以下、『実録』の句読点、傍書は筆者がつけたものである。なお、一部は関周一氏のご教示による。

(21) 六曹は太祖元年には正三品の典書二名を最高職員とし、その他に典書・議郎を置いたが、太宗五年正月壬子には以下の通り官制を改めた。各曹ともに判書(正二品)一名、典書・議郎を罷め左右参議(従三品)各一名、正郎(従五品)・佐郎(従六品)各一名を官員としていた。末松保和「朝鮮議政府考」(吉松保和朝鮮史著作集五「高麗朝史と朝鮮朝史」所収(吉川弘文館、一九九六年)。初出は『朝鮮学報』第九輯、一九五六年四月)三〇四頁。以下、本論文を末松「議政府考」と略す。

(22) なお、朝鮮総督府編纂『朝鮮語辞典』(国書刊行会)では典客司の職掌を「使臣倭野人迎接、外方朝貢、宴設賜與等」とし、使臣を「支那使臣」としている。なお、現在のところ筆者は『実録』を通読した上では使臣を日本国王使の使者として、またそれ以外の日本人の使者については使人と区別して記している例が多いため、日本国王使を意味し

ていると考えるが、関周一氏より使臣とは朝鮮語では「命を奉じて外国に使用する臣」を意味することから、この「支那使臣」は朝鮮王朝王朝が明などに派遣した使節(朝鮮官人)の解釈も可能であるとご教示を頂いた。

(23) 『経国大典』は何度かの議定及び勘考を経て、最終的には成宗十六年正月元旦より行用された。『経国大典』編纂については、末松保和「経国大典解説」(学習院東洋文化研究所景印『経国大典』所収、一九七一年)麻生武亀「経国大典の制定」(朝鮮総督府編『李朝法典考』第二章、一九三六年初版。一九九七年第一書房による復刻を利用)、韓祐勅(平木實訳)『朝鮮通史』(学生社、一九七六年初版、一九九一年重版)、韓永愚(吉田光男訳)『韓国社会の歴史』(註13前掲書)を参考にした。なお、学習院東洋文化研究所景印の『経国大典』は田川孝三氏所有の成宗十六年(一四八五)最終定着本(木版本)を景印したものである。

(24) 『国朝五礼儀』(早稲田大学図書館蔵)序による。

(25) 一方で、前例にないものについては議政府に呈報し、議政府の計らいによって事を進める結果となったので、むしろ議政府の権限は強化されたとも言われる(末松「議政府考」三〇四―三二〇頁。註21に同じ)。覚錠は高麗最後の国王である恭讓王政府が派遣したと考えられている(石井正敏「善隣国宝記」(巻上)補注)田中健夫編著『善隣国宝記・新訂続善隣国宝記』五五一―五五二頁。集英社、一九九五年)。

(26) 『実録』定宗元年六月。

(27) 『実録』太祖五年十二月乙巳条。

(28) 『実録』太祖六年正月乙未条。

(29) 『実録』太祖六年四月戊申条。なお、暹羅斛人は西八品頭のやや後ろであつた。

(30) 『実録』太祖二年六月癸丑条。

(31) 『実録』太祖二年六月癸丑条。

(32) 『実録』太祖二年六月癸丑条。

(33) 源道鎮が、姓名字号の入った小印を太宗に請求した際に、代わりに一顆を刻印したものを授けようと太宗に反対意見を啓し、止めさせたこともあった。

(34) 『実録』太宗五年十二月戊辰条、同月戊寅条。

(35) 『実録』太宗六年正月壬辰条。

(36) 『実録』太宗七年二月辛亥に来聘した日本国王使と太宗は三月乙丑条に引見し升殿した他、五月壬戌条でも引見した。

(37) 『実録』十二月丁亥条の「日本国王使」と考えられる。

(38) 『実録』太宗十三年六月戊午条に雨のため座殿受朝ができなかった倭僧の詣闕希望に対して成石璘、河崙らは「皇帝君臨天下、四夷来。王未不見之、今見倭僧、無所不可と回答し」国王は石璘等の議に従った記事があるので、詣闕は晴儀であったことが確認できる。

(39) 『実録』太宗十四年四月十七日条。末松「議政府考」三〇四―三一〇頁。

(40) 応永の外寇については、田中健夫氏の「朝鮮との通交関係の成立」(『中世対外関係史』東大出版会所収、一九七五年)を参照のこと。

(41) 『実録』世宗元年七月庚申条。なお、この書状は、対馬島は朝鮮に帰属するものであり、太宗の招諭に応じなければ朝鮮側は再度出兵する、という意を内容としている。

(42) その結果、都都熊瓦は、礼曹判書に書状を送り、印を請求した。

(43) 『実録』世宗元年九月癸亥条。

(44) 『実録』世宗元年九月戊戌条で、世宗は「倭人接待、自今更始、礼曹宜與議政府擬議施行、其築館城外之外、為今急務」と急ぎ倭館建築を進めるよう述べたが、金漸が冬に近いため時期が無理であると上啓したとある。

(45) 『実録』世宗四年閏十二月庚午条。

(46) 『実録』世宗五年一月丙午条。

(47) 『五礼儀』は『世宗実録』(以下『世宗』と略す)巻一二八から巻一三

四にあたる。うち、「賓礼」は巻一三三に収録されている。

(48) 韓祐勅(平木實訳)『朝鮮通史』(註23前掲書)、韓永愚(吉田光男訳)『韓国社会の歴史』(註13前掲書に同じ)など。

(49) 『実録』太宗十四年八月丁未条。田中健夫註40前掲書一二四頁から一三五頁に掲載された対馬から朝鮮への通交者一覧。

(50) 『国朝五礼儀』(註24前掲書)序。

〔現代文化学部助手(日本史) 一九九八―二〇〇〇年度個人研究員〕